

員起シ

吉村 昭

文藝春秋

総員起シ

昭和四十七年一月二十五日 第一刷

定価 五五〇円

著者 吉村 昭

発行者 檜原 雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五局一二一一

印刷 凸版印刷
製本 大口製本

万一落丁の場合はおとりかえ致します

© 1972 Akira Yoshimura

Printed in Japan

0093—302260—7384

総員起シ 目次

海
の
柩
3

総
員
起
シ
57

鳥
の
浜
195

装
幀
岡
本
半
三

海
の
柩

一

部落の者たちは、なにが起ったのか知らない。ただ手のない無数の水死体が、岩だらけの海岸に、大きな魚の死骸のように漂着したのを見ただけなのだ。

部落の背後には、北海道の巨大な背骨にも似た日高山脈が迫っている。岩肌を露出させた支脈が、荒々しく部落を刺しつらぬいて海にせり出し、鋭い先端をもつ岬を形づくっている。板ぶきの家々は、海岸線に沿って軒をつらね、背後の岩山に海へ押し落されまいとしがみついているようにみえる。

そんな小さな部落にも、一カ月ほど前艦砲弾が二発落下した。数日つづいた雪がやんだ日で、部落は、まばゆい雪の輝きにつつまれていた。

正午を少しすぎた頃、風いだ沖の海面に艦影が浮上した。浜で海草をひろっていた女や老人たちは、北辺警備の日本の潜水艦だと思った。が、その直後空気を引き裂くような音が空を圧し、岩礁ののぞく海面に大きな水柱が上った。つづいて飛来した砲弾は、部落の裏手にあたる水成岩の丘の中腹に炸裂、爆風と震動で家々の屋根をおおっていた雪がすべり落ちた。

潜水艦は、そのまま海上にとどまっていたが、やがて静かに動き出すと岬のかげに消えていった。

部落の者が、隣村の役場に走った。二発の艦砲弾の落下は、部落が危険にさらされている激しい不安を部落の者たちにあたえた。が、その日の夕方調査にきた陸軍の将校の一言によって、かれらの興奮はたちまち萎えた。将校は、

「なにを勘ちがいして、こんな所を砲撃したんだろう」

と、佯しい部落の家並を見まわしながら苦笑した。

熱心に説明していた部落の者たちは、拍子ぬけたように口をつぐんだ。艦砲射撃は、アメリカ潜水艦乗員のなにかの気まぐれか錯覚であって、部落には砲撃を受けるに価するものがないことにあらためて気づいたのだ。

かれらは、弱々しげな眼をして、黙って海をながめていた。

部落に、働きざかりの男はいなかった。戦争のはじまった頃には、海岸沿いの村道に出征兵士を送る旗の列がみられ、それは国鉄の通る隣村へ通じる峠を越えていった。が、いつの間にか旗の列もみられなくなり、多くの若い男や妻子のある男たちが、家族たちの見送りを受けるだけで部落から次々に消えていった。

漁船の大半は、浜に引き上げられたままになっていた。老いた漁師は残っていたが、エンジン動かす油も不足がちで、舟の出ることは稀であった。

部落前面の海は、豊かな魚介類に恵まれていた。鮭、鱒、鯿、鰯等が群泳し、岩礁の多い海底には、たこ、かれい、蝦、毛蟹などが棲息し、漁獲を求めて内地からの漁船も集った。が、それも戦争がはじまってからは絶え、海はそのまま放置されている。

網の入られることも少なくなった海には、魚が群れていた。時折り乏しい油を使って漁師が海に出ると、舟が沈みそうになるほど魚を満載してもどってくる。浜は、その時だけ活気にあふれ、家々からは魚を焼く煙が立ちのぼった。が、潜水艦による艦砲射撃があったから、漁師たちは舟を出すことをためらうようになった。沿岸の他の部落からは艦載機の飛来も伝えられ、部落の前面にひろがる海が戦場の一つと化していることを知るように

なつたのだ。

漁師たちは、岸から近い海面に小舟を出して魚を釣り、女や老人は、磯づたいに昆布やふのりを拾ったりして日々をすごしていた。そうした森閑とした部落にとって、死体の群は人々を驚かせるのに充分だった。

その日は、朝からの震で、浜に人の姿はなく、海上には濃いガスがよどんでいた。初めに海面を漂い流れてくる物を発見したのは、隣村の分教場から土曜日の授業を早目に終えてもどってきた子供たちだった。かれらは、茶褐色の漂流物を眼にとめて海岸に下りた。大きな魚の死骸のようでもあり、木材のようにもみえた。が、やがてゆるやかな海面の起伏に上下して近づいてくるものが、突っ伏した人間の体らしいことに気づいた。

かれらは顔色を変え、近くの漁師の家に駆けこんだ。

浜に出た老漁師は、子供たちの言葉が事実であることを知った。しかも、その後方に同じような茶褐色の衣服をつけた水死体が海岸に近づいてくるのも見出した。

半鐘がたたかれ、人々は、震の中を浜に走った。漁船の海に出ることも少なくなった部落では、水死体を見ることも長い間絶えていたのだ。

かれらは、眼前の光景に身をすくませた。漂流物は二個だけではなかった。濃いガスの

中から淡くにじんだ茶褐色のものが、後を追うように次々と現われてくる。たちまち岸に近い海面には、二十体ほどの同色の水死体がひろがった。

「難破だ」

かれらの中から、声がもれた。

部落には、数多くの前歴があった。

……千島列島の東側を南下する寒流は、根室半島から釧路沖を経て、北海道南端の突出部襟裳岬えりもをかすめると本州の太平洋沿岸へと向う。その潮流は、襟裳岬のかげの両岸にようにどみをつくり、漂流物を憩やすみわせる作用をもつ。

部落前面の海は岩礁も多いためか、殊にその現象がいちじるしく、難破船の遺体や流木の漂着が多い。昭和初期には、ロシアの貨物船が荒天で沈没し、船員の水死体が五十二体打ち上げられたこともある。そのため百人浜という別称も生まれたほどで、その後もしばしば水死体の漂着がみられた。

そうした地理的条件が茶褐色の水死体を部落の海岸に近づけたのだろうが、その数は余りにも多かった。ガスの中からは絶え間なく茶褐色のものが湧き、解けかけた筏いかだも姿をあらわした。

それらの水死体は、さまざまな点で通常の漂着死体と異っていた。

それまで部落の扱ってきた死体は例外なくかなりの日数を経た腐爛したものばかりで、波にもまれ岩礁にたたきつけられて衣服もはぎとられているかボロのように切り裂かれていた。が、ガスの中から湧き出てくる死体は腐敗ガスで膨張している様子もなく、衣服も損われている気配はない。新しい水死体ならば海中に沈むはずなのに、それらは確実に浮いて流れてくる。それに続々と姿をあらわす死体が、すべて同色の衣服をまとっていることも奇妙だった。

漁師の一人が、おびえながらも小舟を出し、鉤かぎのついた竿で水死体を海岸に曳いてきた。磯に引き上げられたのは、防寒服と防寒帽に身をつつんだ兵士の死体だった。足にはゲートルを巻き、体には救命胴着がはりついていた。

人々は、あらためて海面をおおう茶褐色の漂流物に眼を向けた。それらはすべて防寒装備をした兵士たちの水死体で、救命胴着をつけているため浮んで流れてくることに気づいた。

玉砕した北海の孤島から流れてきたのだと、或る老人は祈るような眼でつぶやいた。北方の島々では、多くの将兵が訣別電文を発しては最後の総突撃をおこない全滅している。海

に追い落され殺された兵士たちの体が、寒流に乗って漂流することもあり得ないことはない。死体は、集団をくんで肉親や妻や子のいる日本を目ざす。ガスの中から兵士たちの水死体が淡くにじみながら姿をあらわしてくる光景は、たしかに老人の口にするような神秘的な想像をもひき起させた。

しかし、兵士たちの身につけた救命胴着は、水死の原因が他にあることを語っているように思えた。

人々の胸に、一カ月ほど前沖合に浮上したアメリカの潜水艦の艦影がよみがえった。砲弾を二発発射した後、潜航もせず静かに岬のかげへかくれていたことは、潜水艦が海を自らの海として自在に動きまわっていることをしめしている。

沖の海上を兵士を満載した輸送船が通り、その船腹にアメリカの潜水艦が魚雷を発射したのではないだろうか。兵士たちは、沈む船上から救命胴着をつけて海に飛びこんだ。春の季節に入っているが、依然として雪の舞う海は冷えきっていて、たちまち兵士たちの体を凍らせ死体と化したのではあるまいか。

磯に上げられた兵士の体は、彫像のように手足を突っぱらし硬直していた。それは、死亡してから余り時間が経過していいことをしめしていた。

人々の顔からは、死体に対する恐れの色が消えていた。水死体は単なる死体ではなく、兵士たちの遺体なのだ。人々の胸に戦時下の国民としての義務感が、頭をもたげた。神聖な遺体を放置しておくわけにはいかないという意識が、かれらをとらえた。

役場から軍に報告してもらうために、老人のひとりが隣村に走った。そして、部落の舟をすべて出して水死体を浜に安置させようと、多くの男たちが浜に散った。

小舟について、焼玉エンジンの漁船も海上に出て漂流死体の引き上げがはじまった。が、海上で死体に鉤竿をかける者も、浜辺でその作業を見守る老人や女子たちの顔にも、虚脱しきったような激しい驚きの表情がひろがっていた。

海面には、鮭の群れるように水死体が充滿している。所々に二、三十体の集団的に寄りかたまつた遺体の群も浮んでいる。しかも、海上一帯をおおう濃いガスの中からは、果しなく茶褐色の色彩が湧き出ている。それは、大魚の群が海岸に押し寄せてくるのに似ていた。

多くの舟がその中を往き来し、船上から竹竿がしきりにふるわれた。そして浜に曳かれてきた遺体は老人や女子たちの手で引き上げられ、戸板にのせられて囊の中を海岸沿いに家の中へ運ばれてゆく。人々の口から掛け声はもれなかったが、海上と浜辺には、大漁時

でもあるかのようなあわただしい光景がくりひろげられた。

遺体は、近くの家々に満ちると徐々に遠くの家へも運びこまれていった。が、海上に浮ぶ水死体の数は減少するどころか、むしろ増加する一方だった。舟の動きも思うようにはならず、水死体にかこまれて立往生している小舟もあった。

海上で鉤竿を動かす者も、浜で死体を運ぶ者にも疲労が目立ってきた。殊に老人や女は、戸板を何度も下しては喘ぎながら死体を運んでいた。

その頃、かれらの顔にいぶかしそうな表情が濃く浮び出るようになった。死体を収容しはじめてから、かれらは妙なことに気づきはじめていた。死体に腕のないものがかなり混っているのだ。

手首の欠けているものもあれば、上膊部から失われているものもある。流水に洗われて血はにじみ出ていなかったが、鋭利なもので断ち切られたように断面は平らだった。中には片腕がない上に、顔面に深々と裂傷の刻まれているものもある。船から海中にとびこんだ折に出来た傷かとも思えたが、死体の半ば以上が腕を切り落されていることはあきらかだった。

手首から先のない兵士の腕は、布につつまれた太い棒のように見えた。それは、硬直し

て上方に突き出されていた。

曇が雪に変わり、暮色がひろがりはじめた。が、舟は海面を動き、戸板は死体をのせて浜と人家の間を往復していた。

峠に、点状の光が湧いた。それはたちまち長い列となって、海沿いの道を押し出されるように下ってきた。村長を先頭に、女もまじえた隣村の者たちであった。

かれらは、浜に焚かれた火のまわりに近寄ってきた。そして、水死体の浮ぶ海にむかって合掌すると、部落の者たちの説明をきき、遺体收容について打ち合わせた。海が闇にとざされはじめているので作業は翌朝再開することとなり、浜の数カ所に火を焚いて漂流死体を見守ることに定めた。

部落の者たちは、隣村の村長たちとともに遺体の調査にとりかかった。

家々では遺体を部屋に上げ、軍服をぬがせてふとんに横たえた。近くの家々には十体近くの遺体が運びこまれ、部屋は遺体で足のふみ場もなくなっていた。

部落には、線香の匂いがみちた。人々は、巡礼のように互に他の家々に入りこんで合掌して歩きまわった。

收容した遺体の数は、百八十二体であった。隣村の者は、その数の多さに驚きの色をあ